

「十二弟子を派遣する」

2023年04月26日

そして、神の国を宣べ伝え、病人を癒やすために遣わすにあたり、次のように言われた。「旅には何も持って行ってはならない。杖も袋もパンも金も持ってはならない。下着も二枚は持つな。どこかの家に入ったら、そこにとどまって、その家から旅立ちなさい。あなたがたを受け入れない者がいれば、その町を出て行くとき、彼らに対する抗議のしるしに足の埃を払い落しなさい。」十二人は出かけて行き、村々を巡り歩いて、至るところで福音を告げ知らせ、病気を癒やした。(ルカ9:2~6)

主イエスは「神の国」の宣教に全力を尽くされた。ガリラヤの民衆は政治的、経済的、身体的、そして、宗教的にも抑圧、差別され、地べたを這うような生活を強いられていた。主イエスはその人々に対し、あなたがたは「幸いである」と宣言し、神に祝福され、生が是認されている恵みの中に生かされていることを示された。それは、ファリサイ派の人々が律法の下で差別管理した状況から解放し、生きることに向かって立たせられる喜びの福音であった。主イエスと出会った人々は、自分であることを丸ごと受け入れ、人間として生きる「神からの赦し」を体験した。神が生きて、働く現実、「神の国」のリアリティを福音として啓示されたのである。主イエスは「神の国」の宣教に当たり、12弟子を呼び寄せられた。目的は三つであった。一つは、主イエスと共にいて、弟子たちに福音が何であるかを教えることであった。二つは、「神の国」の恵みを民衆に言葉で語ることであった。言葉は神の言葉で人を真に励まし、立ち上がらせた。三つ目は、社会的に疎外された病人を癒やし、悪霊につかれた者を悪霊から解放することであった。これらの宣教は、ユダヤ人の交わりに回復する人間回復の福音であった。

主イエスは弟子たちを宣教に遣わすにあたり、「旅には何も持って行ってはならない。杖も袋もパンも金も持ってはならない。下着も二枚は持つな」と言われた。まず、何も持つな、宣教は素手で当たれということである。宣教するに際し、あれがあれば、これがあればと思うが、それらの一切を捨て、宣教は神が先導されるので、神に信頼して励めという勧めである。次に、杖も袋もパンも金も持つな、無一文で宣教しろと言われた。生きるに必要な糧は、神が備えてくださるという信仰である。また、下着も二枚は持つな、自分を守るようなことはするなと言われる。「神の国」の宣教は素手で、無一文で、自分を守ることをせず、当たれと言われる。これらは、人間的な知恵や力が排除され、神への全面的信頼において可能であるとの勧めである。そして、「どこかの家に入ったら、そこにとどまって、その家から旅立ちなさい」と言われる。ある村に入ったら、一軒の家に滞在し、村中に「神は生きておられる」と宣教して回る。その時、もっと都合の良い家があるのではと思って、滞在した家を変えてはならない。次の町に向かうまで、その家に留まり続けなさい。弟子たちの好き嫌いではなく、神の定めた家として留まりなさいと忠告された。最後に「あなたがたを受け入れない者がいれば、その町を出て行くとき、彼らに対する抗議のしるしに足の埃を払い落しなさい」と言われた。宣教を受け入れない者が当然いるだろうが、町を出て行く時、彼らには足の埃を払い抗議のしるしにしなさい。福音は安易な受容ばかりでなく、反対意見の表明も必要であると語られた。この勧めは、福音は安易なことではないという意味ではないか。12弟子たちは出かけて行き、村々を巡り歩いて、至るところで福音を告げ知らせ、病気を癒やした。福音はあまねく、宣教されていった。